

かなより覚えやすい

昭和28年、私は指導主事をやめて、小学校の一年生を担当しました。かねて考えていた新しい教育法について、その効果を確認したかったからです。

わが国の文字教育は、明治以来、「まずかなで読み書きすることを教え、それに習熟させた後でないと漢字を教えない」ということになっています。

国語学習は、言葉であれ文字であれ、理解できればそれで良いというものではありません。理解した上でそれを反復練習し、それが身につくについて自然と使えるようにならなければ、実用にはなりません。

だから、最初から正しい言葉や文字、社会の標準的な言葉や文字を教えなければいけません。便宜的なものが一度身についたら、それを改めることは、見かけはどんなにやさしそうに見えても実は大変むずかしいものです。

ところが、“がっこう”という便宜的ないわばにせものを学習させ、それに習熟させた後に“学校”というほんものを学習させているのです

から、漢字の学習が必要以上にむずかしくなるのが当然です。

その上、“学校”と学習してこそ、“学びや”の意味が正確に理解でき、それが“学問”や“大学”にも結びついて理解が深まるのであって、“がっこう”では“がくもん”と少しも結びつきません。

そう考えて、私は、一年生に対して初めから“学校”と数えることを試みたのです。この実験は昭和42年まで、14年にわたりましたが、その結果、私の考えの正しかったことが証明されました。

漢字教育が小学校で成功しないのは、漢字がむずかしいからではなくて、初め、かなで学習させ、それを漢字に改めることがむずかしいからだ、ということを実証しました。

ところで、この実験をしている間に、思いがけない発見が二つありました。その一つは「一年生にとっては、漢字の方がかなよりも容易に覚えられ、しかも読みやすい」ということです。また、漢字でも、“七”や“八”よりは“雪”や“雲”の方が覚えやすい、ということでした。

もう一つは「漢字を最も容易に覚えるのは一年生で、漢字を覚える能力は学年が進むにつれて衰える」ということです。この事実は、最近著しい発達を遂げた脳生理学が明らかにした「機械的な記憶力

は生後の三年間が最高で、それ以後は次第に低下する」という学説と一致しています。

この二つは、今までの常識と全く正反対の事実で、私も初めてこの事実を発見した時には、何か特別の事情による例外的事実ではないかと疑ったほどです。14年間にわたる追究で、初めてそれが普遍的な事実だということがわかりました。

この二つめの発見が、その後14年間にわたる“幼児の漢字教育”実践の理由になるのですが、この間に発見した漢字教育の原理が“漢字で教える”ということだったのです。

覚えようとしなければ忘れない

現代の心理学は、記憶について「覚えようと努力して覚えたものは忘れるが、覚えようと努力しないで覚えたものは一生忘れない」と述べています。

覚えようと思うからには、何かその理由があります。目的と言った方が使いでしょう。例えば、「明日の試験のために覚える」というような。

このような記憶は、試験が済めば自然に忘れていきます。

それは、目的を果たした以上、頭にいつまでも残しておく代物ではない、として頭から無駄を廃棄する自然の作用だということです。だから“漢字を教える”と、子供はこれを努力して覚えるものの、試験が済むと忘れてしまうので漢字力が少しもつかないというわけです。

私たちは幼児期に覚えた日本語を、一生忘れません。親が日本語を教えようとして教えたわけではありませんし、子供も日本語を覚えようとして覚えたわけではありません。努力しないでひとりで覚えたから、一生忘れないのだ、というわけです。

“漢字で教える”というのは、漢字を覚えることを目的とさせないために考え出されたものです。漢字は教育の手段であって目的ではないから、こうして覚えた漢字は一生忘れないはずだ、という考えです。

しかし、“漢字で教える”ことの効果はそれだけではありませんでした。他に、もっともっと重大な教育効果があったのです。それは実践している間に、だれの目にも明瞭になっていったものです。